

---

# 復讐者の仲間のような感じの人

仮名ライター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

復讐者の仲間のような感じの人

### 【NNコード】

N8860N

### 【作者名】

仮名ライター

### 【あらすじ】

原作のクルタ族が虐殺される前に、クルタ族の1人に転生したオーリ主が、ある目的のため何とか生き延びようと些細な努力をし、クラピカと共に出来ることをしながら原作に介入する物語

俺は思考する

何だろうね俺はもし他の人に話したら、頭がイカれてるって言われるから絶対に内緒にしてる事がある

何と前世の記憶がある、しかも結構鮮明にあるのだ、少々ぼやけている箇所もあるが、支障はないだろうと思う

俺は生まれ変わりを経験したのである、

しかし内心はしゃぎまくったね、想像して欲しいまさしく頭脳は大人体は子供を体現してるので

色々妄想するだけで楽しい、赤ちゃんの頃はその妄想だけですごいじたぐらいだし

よく笑う赤ちゃんではなく、一ヤ一ヤしてる気持ち悪い赤ちゃんだつたと育ての親は言つてる

ここで疑問に思うが俺には親はない、一応いたけど自分を産む時にかなり衰弱してお亡くなりになつたらしい

父親はそれが精神的にショックを受け後を追つようご病気でお亡くへなりになつた、何と脆いお方だ

接する機会が少なかつたからあまり悲しくはなかつた

そんな悲劇の過去を振り返るより、薄情かもしけんが将来の輝かしい未来の方が最優先事項なのだ

だが輝かしい未来を想像して喜んでいられるのもつかの間だった

俺は生まれ変わつてからこの世界に色々疑問を持ち始めた、周りの人間のおかしい発言がおかしいのだ

魔獸が出たやら色々だ、前世に魔獸なんて存在しないし聞いた事ない、もしや前世でそういう魔獸がいたとしても秘匿されてたとか？

と考えていたが

これが俺にとってこの世界が別の物だと何となく気付かせる、聞き

捨てならない言葉を聞いたのだ、世界とかもはやどうでもよくなる  
代物

——【クルタ族】俺の住む村の民族の名前  
——そして隣に住んでる夫婦の子供の名前が【クラピカ】

いやいやさすがに生まれ変わったりするような非現実的な事を経験  
した俺だが  
そんなクソつたれな事ないだろ偶然だよ偶然だつてそれはないつて  
否定ともしやまさか？ってな感じで混乱しまくっていた  
確定ではない、情報が足りないと否定しまくっていた  
たが

ところがどっこい現実は非情なのだ

成長するにつれ脳みそに叩きこまれるこの世界の常識、文字、文化  
酷似してるで済ませられないレベルじゃない、それならどれだけ良  
かつたか

組み上がったピースが嫌でも想像したくない物に出来上がる

そう俺の前世とは異なる世界、だが知っているのだこの世界を事を

少年ジャンプの俺が最も好きな作品【H×H】の世界

有り得ないと否定したいが、見に起きた現実を受け入れるのは時間  
かかったが

受け入れない現実逃避するのは愚か者のする事だ、多少諦めな感情  
もあつたかもしれないがそれはそれだ

認識したらもう嫌になつてくる自分の生まれ変わった環境に  
【クルタ族】である俺の死亡フラグを回避せねばならないのだ

認識したらもう嫌になつてくる自分の生まれ変わった環境に  
【クルタ族】である俺の死亡フラグを回避せねばならないのだ

何だかんだで今現在8歳

原作知識のある俺だが今の所出来る事は少ない

クルタ族を皆殺しにする【幻影旅団】に抵抗出来る策を何もしていないのだ

このまま行けば数年後に起きた、クラピカ君以外のクルタ族目玉抉られ皆殺し事件が発生する

案はあるが実行するのは不可能

1 クルタ族の皆に数年後に幻影旅団つて言つイカれてる連中がやつて来るから逃げようぜ！作戦  
子供の戯言と言われます誰も信じてくれない、仮に信じてくれたとしてもどこに逃げるつて話しだ、原作知っている俺だからわかる  
幻影旅団はどこに居ようと追つて来る恐ろしい連中のため不可能

2 僕だけあらかじめ逃げようぜ！作戦

俺達クルタ族の集落はかなりの山の奥地で、森や山に囲まれた言うならば秘境の地に住んでいるのだ  
別の街に行く道は大人しか知らないので集落から出ても野垂れ死んで、魔獣のご飯になるのが落ちだ

いざという時はありかもしけん、体を鍛え街までの行き方を知つたら決行可能もありがたが現在は不可能

3 H×Hの世界の異能【念】を覚え返り討ちにしようぜ！作戦  
これは念使いにならなければならない、あの幻影旅団のウボオーがなかり強かつたと言つたぐらいだ

念は間違いなく知ってるどころか会得してるだらう、念能力者には念能力しか対象出来ないはずだし

だが無理だつた大人に遠まわしに念教えてくれと言つたらなぜ念を知つてはいるかのかはさておき今の俺（8歳）には教えるのは早すぎる、いずれ心身共に成長したら教えるから我慢しろ、だとさ諦めきれずに泣きついたけど、怒鳴られ却下されてそれ以来念の事を聞いても無視されるしまつ、覚えたしても追い返すのはまず無理か、よつてこの案も不可能

4 クルタ族唯一の生き残りクラピカにくつ付いて一緒に生き残ろうぜ！作戦

これが下手したら生き残る確率が案2より高いかもしね

ただ原作知識のある俺でも、原作5年前とだけ書かれてただけで明確に書かれていないため不安が多い

それに今クラピカ君俺と同じ8歳原作では確か17歳、幻影旅団に村を襲われたのは12歳ぐらいの計算だ

この案を実行するなら、クラピカ君が12歳になつたら四六時中張り付いていなければならぬ、しかしこれではまるでストーカーだ生き残るためならしようがないけど

結論を出すのは早計だが、案4が一番生き延びる可能性が高いふ一む、そうなら実行するにしてもクラピカが12歳になるまで時間があるし今出来る事とは何だらう?

- 1 肉体の強化（現在進行形）
- 2 念をどうにかして留つ（今のところ無理）
- 3 生き延びたその後の事を考える
- 4 案3のため少しでも外の知識&生きるための知識
- 5 死亡フラグ回避作戦案4のためにクラピカ君に好印象を与える、ストーカー行為しても気にされないぐらい仲良くなる（現在進行形）

取り敢えずこれぐらいかな、全ての案は直ぐに解決出来る物じゃないな4年の期間で出来る事をしよう

念は覚えるのは俺の中では確定事項だ、理由は簡単念使いになりたいからだ！

死亡フラグ回避も大事だが原作ファンとしてはこれは捨て置けんだ！

今は無理だがその下地作りの肉体強化は必須だな、この世界はアホな感じに人間の限界値がおかしい

前世では人間がどんなに頑張つても越えれないラインを努力次第で余裕でぶつちぎる

才能や環境によって違うかも知れないが、原作のクラピカ君は初期の頃から身体能力はそれなりに高い

同族である俺のポテンシャルもそう悪くないはずだ、少し前から鍛えてはいるがよりいつそ取り組もう

知識は勉強あるのみ、これはあまり得意ではないがやれる事はやつておくべきだな

——最後のクラピカ君と仲良くなるか、これが一番ミスつたらヤバいかも……

「クラピカくうううん！ あそぼ！」

窓から少年がひょっこりと顔を出す

「うん、今行くから待つて」

今俺が声をかけたのはショタつ子クラピカ君だ  
原作の絵では女に見間違つくらいの中性的な顔してる、実際今でも男と知らなかつたら女と思えるぐらいだし

「お待たせ、今日はどうするの？」

「とりあえず広場にこいつを、どうせ皆こいつだろ」

「うん」

クラピカ君がコクリと頷き俺の後を付いて来る

意外な事に今のクラピカ君は原作のよつたクールな感じではない、大人しく素直でいい子だ  
やはり目玉抉られ皆殺し事件以降、一人で生きて行くためにあんな感じになつたのだろうか

原作でもクラピカがゴン達に出会つまでの経歴は明かされてないしながら子供らしい会話をしながら村の広場に付いた  
広場には年齢様々な子供が数人いる、俺とクラピカ君は同じ年齢だが俺の方が早く生まれたからお兄さんだ

広場で何時のように自分とクラピカ君含む子供達としようもない遊びをして遊んでいる、精神年齢が幼子ではないからガキの遊びなぞつまんないが、クラピカ君ストーカー計画には必須なんだからしうがない

そんな事を考えていたら誰かにクイッと袖を引っ張られた

「どうしたの？」

いつの間にか俺のそばにいたクラピカ君が、首を傾げて俺を真つ直ぐに見つめてくる

何てあどけない顔してやがるんだ、これが数年後復讐<sup>レ</sup>のためなら死んでもいいとか言い出す青年になるんだから、もうゾッとするね

「何でもないよ、昼からどんな勉強すんのかなって考えてただけ」

「そう……」

「どうする、ちょっと速いけど先生のところに行くか？」

「うん」

先生とはクルタ族の教育係みたいな人だ、山奥に住んでる民族とは思えない程教育水準は高い、数学、H×H世界の歴史やその他諸々原作のクラピカの博識っぷりが納得するぐらい濃い事まで習わされる、詰め込み教育つてレベルじゃねーぞって感じだ

だからこそ少数民族なのがもしれないな、クルタ族は1人1人の人間がかなり優秀で知能と身体能力が高い、これを先祖代々受け継がせて行くなら少人数の方が効率がいい

山奥に住む自分達の民族だけの文化で完結せず、他国多方面の知識を持ちながら、それでも極力クルタ族以外の者と関わらない頭がいいからこそ理解してるんだろう、自分達の持つ特殊な瞳【緋の目】の希少価値を、世の中にいるゲス地味た収集家が居る事にだからこそこうやって隠れるように住んでるんだろうな、ぶっちゃけ隠れるなら街にクルタ族つて事隠して住んだ方がいいと思うけどねまあ無理だろうね、民族のプライドが邪魔してそんな事しないだろう

「ねえ、聞いてる？」

「あーすまん聞いてなかつた、何？」

「今日から勉強の後に体術を教えるつて先生言つてたけど、何をするのかなって」

「そう言えばそんな事言つてたな、うーん体術つて何するんだろうな、殴り合いとかか？」

「殴り合いつてちょっと怖いね……」

「心配すんなつて冗談だから、いきなりそんな事させられないだろ」

「……うん」

「ゴクリ……これ本当に原作クラピカみたいになるのか？ 仲良くなろうぜ作戦決行してきてもう結構たつが、復讐とかそんな概念から

程遠い性格してんぞ

その後先生による地獄の勉強会で頭を酷使し、慣れない対術の稽古で体中悲鳴をあげている俺、尋常じゃないぐらいスバルタだ別に俺が特別に貧弱という訳ではない、早朝から肉体強化のために色々やつてるせいで疲れがドツときたのだ

「大丈夫？」

「平気だつて」

心配してくれるのはクラピカ君だけだ、他の糞ガキ共はさつさと家に帰りやがつた

しかしクラピカ君はいい子だ、これで女の子なら完璧なのに

「どうしたの、ジッと僕の事見て？」

「何でもない、それより家に帰ろうぜ」

「うん、でもちょっと待つて、はいこれ

クラピカ君が俺にくれたのは、何かドロドロした緑色した固形物が入った木を丸く加工した小さなコンパクトだった

「これ何？」

「前に父さんと出掛けた時に取つて來た薬草を漬して塗り薬にした物だよ、痛い部分に付けるといいつて父さん言つてた」

「くれるのか？」

「うん、使って」

「なんと……優しい子だ、俺が女なら惚れとるぞ

「おお、ありがとう、大事に使わせてもらひうだ

「なくなつたら戻つて、まだ家にあるかい」

「おひ」

家に付くまで、クラピカ君と今日戻つた事をお互に話し合ひ歴史や別の国の文化に人一倍興味のあるようで、楽しそうな顔して俺に明日はどんな事勉強するんだろう、と語つてくれる

「それじゃあ、また明日なクラピカ君」

「うん、まだ明日ねアルベル」

別れを告げ、クラピカ君は家に入つて行つた  
アルベルこと俺もお世話になつてゐる育ての親の家に入る

「ただいま」

お帰りなさいと返つてくる育ての親のおばさんの声を聞き、どこか不安な気分になる

おばさんが作つてくれた夕食と一緒に食べながら、今日どんな事勉強した今日何があつたかを話す、おばさんは微笑みながらそれを聞いてくれた

自分の部屋に戻る

吐き気がする

俺はゲスだ

おばさんは死ぬ

幻影旅団に殺される

俺が必死に頭を下げる原作知識をおばさん喋つたりもしかて避けられるかもしれない

だが俺はそれをしない、諦めているから

おばさんの命も先生の命も子供達の命も、クルタ族の命全てを  
達觀してると悟ってるとかそんななんじやない、あきらめの感情の  
先に俺の中に生まれた物は

めんどくさい

俺は凡人だ、自分の事を考えるだけで精一杯なんだ  
他人の命を救うとか無理、どうするとか考えるのもめんどくさい  
自分が助かればそれでいい

手に持つた手帳、忘れてしまわないように原作知識を日本語で書き  
続つた物を何度も読み返す、読み返したところで無駄なのはわかっ  
てるんだけどね……

手帳を部屋に置かれた棚にしまつ、隠す必要はないどうせ見つかっ  
ても俺以外の人間は読めないし、盗られたとしても[写しがまだ何冊  
がある

「……ゲロ吐きそつ」

そう呟き、俺は布団に寝転んで目を瞑り考えるのを放棄した

クラピカ

「クラピカくううん！ あ そ ぼ！」

もうそんな時間だつたんだ、僕は慌てて窓から顔を出して外にいる

## アルベルに向かつて言つ

「うん、今行くから待つて」

鞄を手に取り、早足で自分の部屋から出る、朝食の後片付けしてい  
る母さんに向かつて声をかけた

「アルベルが来たから行つてくるよ」

「ええ、行つてらつしゃい」

「うん、行つてきます」

扉を開けたら僕を待つててくれるアルベルがどこか不自然な笑顔  
をさせて立つている

いつもアルベルはこんな感じだ、ちょっと前にその事を言つたら「  
そうか?」と不思議そうに悩んでいた  
普段見せないアルベルの困つた顔を思い出すでだけで笑っちゃいそ  
うになる

僕は笑いそうになるのをこらえた、いけないいけない待つてくれて  
たんだし

「お待たせ、今田はどうあるの?」

「とりあえず広場にこいつが、どうせ皆いるだろ」

「うん」

基本僕はアルベルとしか遊ばない、広場の皆とも仲良くなれるけど  
誰が一番仲がいいと言われたらアルベルだつて答えると思う  
だつてずっと一緒にいるから、僕が物心付いた頃からアルベルと一  
人で一緒にいる

それが普通何だと思つてゐるし今でもそう思つてゐる

広場に付くと皆と遊んでいると、いつの間にか皆の輪の中から外れ

考え事をしているのか1人佇んでいるアルベルがいた  
アルベルに近寄り声をかけた

「アルベル？」

呼んでも反応しないからアルベルの袖を引っ張る  
やつと気付いのかアルベルが僕の方を向きハツとした表情になつた

「どうしたの？」

「何でもないよ、昼からどんな勉強すんのかなつて考えてただけ」

「そう……」

嘘だね、アルベルがこういう顔してる時は変な事考えてる時だけだ、  
ダテに僕とアルベルはずつと一緒にいるわけじゃない

何考えてたのつて聞いても、はぐらかされるからもう聞かない事に  
してる

「どうする、ちょっと速いけど先生のところに行くか？」

「うん」

僕は勉強が好きだ、先生の話しを聞いてるだけでワクワクする  
ふとアルベルの方を見ると、相変わらず難しい顔しながら頭を捻つ  
てる、アルベルは歴史があまり好きじゃないらしいこんなに面白い  
のに

授業も終え先生が昨日言つてた体術の時間になつた

僕は体を動かすのも好きだけど、殴つたり殴られたりするのは好き  
じゃない

さつきアルベルがたいしたことないって、僕を安心させるために言  
つたのを思い出しちょと気持ちが落ち着く

体術の時間が始まった、先生がアルベルを指名して基本の体の動かし方などを説明する

別に先生はアルベルをいじめようとしてる訳じゃない、アルベルは同年代や少し上の人より鍛えてる

朝早く起きて運動してるのをアルベルは毎こな黙つてやつてる事は知つてているがバレバレだ

僕にも教えてくれるのはちょっとムカつく、体術を習う事だし今度から僕もアルベルに話して一緒にやろうと思つ、断つても聞いてやらない僕に黙つてた罰だ

アルベルが先生やらみんなの実験台にされ結構ボロボロになつてゐる体術の時間も終わり、先生に挨拶して皆帰つて行く  
僕はアルベルが少しだけ心配になつた

「大丈夫？」

「平氣だつて」

大丈夫つて言つてるが体はそつは見えないあちこち痛そつに庇つて  
いる  
またよからぬ事を考へてるんだろう、なぜか僕の事をジッと見てくる

「どうしたの、ジッと僕の事見て？」

「何でもない、それより家に帰ろ」  
「ば

そつこねばアルベルに渡そつと思つてた物があるんだ

「うん、でもちょっと待つて、はいこれ

鞄から小さめの木製のコンパクトを取り出しアルベルに手渡した

「これ何？」

「前に父さんと出掛けた時に取つて来た薬草を漬して塗り薬にした物だよ、痛い部分に付ける といつて父さん言つてた」

「くれるのか？」

「うん、使って」

「おお、ありがとう、大事に使わせてもらひだぞ」

「なくなつたら言つて、まだ家にあるから」

「おう、ありがとう」

普段素直じゃないアルベルが素直にお礼を言つてくれるから、何か恥ずかしい

家に帰る最中、歴史などの樂しことをアルベルにわかつて貰つため多いに語つた

「それじゃあ、また明日なクラピカ君」

「うん、まだ明日ねアルベル」

もつと話したかつたけど残念、アルベルと別れ家に入るやつぱりアルベルといふ時が一番楽しい、明日はアルベルと何しよう?

変わらないたわいもない日常、母さん父さんアルベルやクルタ族の皆さんな日がずっと續けばいいのに

## イチ話（後書き）

クルタ族の設定は独自解釈や設定が入っています  
クラピカの性格は幻影旅団の虐殺やまだ年齢的なものを考え原作とは全く違う物になつてますので違和感がありまくりです  
原作クラピカファンの皆様申し訳ありません  
後クラピカは男であつてますよね？

この世界に生まれ変わって数年頑張つてやつとこさ成果が出てきた身体能力これはまずまずと言つた所だろう、ガキのカテゴリーの中では俺がトップクラスになつてゐる、日々の積み重ねは大事だな早朝トレーニングしてよかつた

もう一つがクラピカ君ストーカー計画の案である、クラピカ君と仲良くしようぜ作戦は驚く程うまくいくる  
男の俺ですらびっくりするぐらい仲良くなつた

早朝クラピカ君と一緒にトレーニング、終わつたら一旦家に帰り朝食をとる

その後クラピカ君と先生の所で勉強＆体術、家の用事がなければクラピカ君と一緒に遊んだり、近くの森で冒険と言つなの脱出計画の下見（街までの行方は未だに不明）

こんな感じのため四六時中一緒にいるのだ、最近はクラピカ君が俺を誘いに来たりする、子供に懐かれて嬉しい気持ちもあるがどう考えても行き過ぎな気がするでもない

このまま行けばストーカー作戦は大丈夫かもしけない、順調順調

ここ最近は先生の授業と平行に体術をクラピカの親父さんにも稽古つけてもらつてゐる、念は教えてくれないけどね  
やはりクラピカ君のお父さんだけあってかなりのイケメンだ母親の方も美形で、その両方の遺伝子が余す事なくクラピカ君に遺伝してゐるやましい

クラピカの親父さんは俺基準だがかなり強い、子供の俺とクラピカ君2人がかりで戦つても触れる事さえできない状態だ

近頃は素手の体術もそうだがクラピカ君の親父さんにはクルタ二刀流と言う、クルタ族に伝わる少し短めの剣2本を使う剣技も存在し

てるため此方も習い始めた

これは曲者すぎる、1本でも剣を使う技術つてのは大変なのに2本共とも使いこなさなければならない、断言してもいい俺には向いてない

様になる程度にはやるつもりだがこれは限界が来るだろ、世の中には才能の壁があるのだよ現にクラピカ君は同じタイミングで習い始めた筈なのに俺より上手く2本の剣を使いこなしてゐる  
いつも鍛錬が終わったらクラピカ君の親父さんはアドバイスしていく、性格もいい最高の親父さんだ鍛錬の最中は厳しいけどね  
そんな感じで今を過ぐしている、現在10歳旅団がこの村に襲来するまでおよそ後2年

死亡フラグを回避して上手く生き残った後の事も考えねばならん、正直何も思いつきません

ガキ一人で生き抜ける程世の中つてのは甘くないだろしね、身体能力は一般人を越てる事は越てるしつつそ強盗にでもなるか？  
子供強盗これは流行るかも……

無理か、まあ死亡フラグを回避した後にでも考えるか……

はい今日は生憎と外は雨

部屋でボーッとしてたらクラピカ君が遊びに來た

「何してるの？」

「何もしてないぞ、暇で死にそう

「ならない物持つてきたよ」

そう言つとクラピカ君は鞄から「つい本を数冊取り出した

「父さんが先月街で買つて來た本を持って來たんだ、父さんが読み終わつたから僕が貰つたんだ」

「太い、まるで鈍器だな人殺せるぞこれ」

「面白いよこれ、アルベルに貸してあげる」

「うーんありがとう、といひで「これは何の本?」」

淡泊な表情から一転、クラピカ君が笑顔になる  
嫌な予感

「聞きたい?」

「聞きたいかも……」

やべえ失敗した

「アイジエンの大陸にかつて存在し高い文明を持ちながら滅びた＝  
ジエヒヤン族で使われてた文字やそこに生きてた人の生活を綴つた、  
とても面白い内容だよ！」

テンション上がつて来やがつた、クラピカ君は意外とこうこうとこ  
ろで熱くなる性格もある、仲良くなつて数年たつて知つたがこうな  
つたら止まらない

「で凄いのがさ、この風習の12歳になつたら――――――」

「へえそつそつといんね――」

「ちゃんと聞いてよ！ で続き何だけどこの文字を見る限り――――――

――

くつ、これは長くなるぞ――

「僕はこの時対立してた民族との交流で疫病が――――――

もう一時間は立ちましたが止まりません

「―――でアルベルはどう思つ?」

「え? そ、そうだな大変だな」

急に話しを振るなよ、全然聞いてなかつたぞ

「聞いてなかつたでしょ?」

「聞いてませんでした、『めんなさい』」

「全くアルベルはしうがないな……もう一度話すから聞いててよ  
特別だからね!」

「えつ……エヒヒ……」

さらに一時間追加された

流石にこれ以上長引いても拉致があかないんので眞面目にクラピカ  
君の話を聞いて、何とか有り難い歴史のお話を終わらせる事に  
成功した

「ところで聞きたい事あるんだけどいいかな?」

「いいけど何?」

「なら聞くけど、アルベルは何で僕の事君付けで呼ぶの? 一緒に  
先生の授業聞いてるみんなには付けてないよね?」

あれそりゃ言えば何でだろう? 他のガキ共は呼び捨て何だが

急に不機嫌になりやがった

「ねえ、何で?」

「うーん何でだろう? 特に意識した訳じゃないんだけど  
「なら僕の事も呼び捨てでいいよ」

「え？」

「だから呼び捨てでいいってば」

なぜそこでムキになる、あれか友達なのに呼び捨てじゃないのが腹立つとかか子供にありがちなじょうもない嫉妬か？

コイツこんな感情まで持ち合わせていたとは意外と厄介なお子様だな

「はいはい今度からそう呼ぶよ」

「た、試しに今呼んでみてよ」

乙女か！

「わかったよ、クラピカ！ これでいいか？」

「う、うん、何か恥ずかしいね……」

珍しく顔真っ赤にしゃがつた、これ何てクラピカ君ルート？ ないからそんな趣味ないから

「ついでだから俺も聞きたい事あるんだけどいいか？」

「え、な、なに？」

「街までの行き方知ってるか？」

「ごめんわからない、父さんにも街までの道順は聞いてないんだ、地図で見たら方角はわかるんだけどひたすら街まで真っ直ぐに行けばいいって物じゃないしね」

「そうか俺と同じぐらいしかわかつてないのか……」

当然か、迂闊に教えて好奇心旺盛なガキが血迷つて街まで行く可能性もあるからな、道中に肉食獣や魔獣に襲われたら大変だし

「街まで行きたいの？ 子供だけで行くのは危ないし、自分の身を

守れるよくなつてからじやないと教えられないつて父さんも言つてたよ」

「わかつてゐつて、ただ知りたかつただけだから」

「ならいいけど……」

クラピカ君は原作もそつたが鋭い人間だ、最近はその片鱗を見せてきて簡単な嘘ならバレてしまうから注意せねばならん

「なあクラピカ君

「むー」

何だコイツ口膨らましてむーとか言いやがつた、普段見せない変な表情に俺も鳥肌が立つてきた、男の癖に気持ち悪い事してんじやねーよ

「な、何だよ、そのむーつてのやめろ『気持ち悪い』

「君”が付いてた

「そんな事で怒んなよ、これから気を付けるつて、なあクラピカ

「それでいい

ちよつと仲良くなつた気がすると感じじる今日この頃

クラピカの性格が  
なぜこうなった……

今現在バトつてます相手13歳俺11歳2歳差ですがぶっちゃけ余裕名前はモブウ名前からしてモブキャラで覚える価値すらない別に喧嘩じゃないよ、体術の授業の一環で組み手してるだけだし

「ちょこまか動くんじゃない！」

モブウのすっとり上段蹴りを伏せるように避け、そのまま足の下を抜け後ろに回る

振り向きざまの裏拳をバックステップでかわし距離をとる

「無駄無駄あ

「真面目にやれ！」

真っ直ぐに俺に向かつて来る、直線的で鈍臭い踏み込みに欠伸が出来

そう

身長はモブウの方があるためリーチは俺よりあるがどうって事はない打ち下ろしの拳打を半身で避け、打撃は当たらないと悟ったのかあからさまに掴みにかかつてきました

掴みかかつてきた右手を払いのけ、胴に手加減した前蹴りをかます、一瞬モブウは怯むも果敢に突進、突っ込んで来る馬鹿の攻撃など容易く読めるのだよ

先程と同じように俺を掴みにかかる、右腕を伸ばし俺はそれを払をうとした際にモブウが右手を引っ込め、左の打撃、フェイントだがバレバレなのだよ

打撃を回し受けの要領で受け流す

「貧弱貧弱う！」

「クソツッ！」

とうとう頭にきたのか大振りのパンチしてきた、それをしつかり目で見て伸びきった腕をかいぐり懐に入る、額に手加減した打ち上げの掌底を当てる

脳がいい感じに揺れ、モブウがぐらりと倒れそうになり隙だらけの状態になった

「貴様はチェック・メイトにはまつたのだッ！ 死ねい！」

思わずテンションが上がる、がら空きのボディに渾身の力を込めた直突きをぶち込もうとした瞬間、何者かに手を掴まれた、いつの間に！

「何が死ねだ馬鹿者！」

「先生……」

「アルベル！ 何度も言つてるが冷静に行動せんか！」

「充分冷静だつたと思つんですが、さつきもモブウの攻撃も全てかわしてましたし」

「そう言つ事を言つてるんじゃない！ 罷として腕立て100回腹筋100回今すぐやれ！」

「……ういっす」

確かに調子に乗りすぎたようだ反省せねば

もう同世代のガキ共には負けないぐらいになつた体術のみならクラピカにも勝てる、クルターノ流での勝負なら負ける

これは俺の欠点だな、武器を使つたら素手と違つて間合いの取り方や体の動かし方まで変わつてくる、いまいちそれに順応できない、つか才能がない

体術は先生や稽古を付けてくれる大人にはまだ勝ちが遠い、最近や

つとクラピカの親父（恐らく念なし）にかすり傷ぐらじ『えれるようになつたけど、所詮そこまでだ  
壁が高すぎる、念の前に基礎を覚えないと糞つてのは理解したが、  
流石に悔しい鍛錬あるのみか

罰の筋トレを終了したと思つたら先生が組み手の相手に俺を選んで  
抵抗虛しく、簡単にしばかれた

体のアチコチが痛いクラピカに貰つた薬を塗らねば、湿布臭いけど  
結構効くから重宝してる

体の痛む箇所を確認していると、クラピカが近寄つて来た

「やりすぎだよ」

「反省してゐつて、後でモブウにも謝つとくよ」

「ハア……」

「何だよ、ため息なんか付いて」

「何でもない……、薬塗つてあげるから服脱いで」

「自分でやるからいひつて」

「いいから早く」

「いいから早く」

最近やたらお節介になつてきたな、原作でもそつか微妙なダメ人間  
風の初期のレオリオに世話焼いてたしな  
脱いでやんよ、子供でムキムキのボディを見て魅了されな

「相変わらず頑丈な体だね」

「鍛えてるからな、これぐらいクラピカ特性の塗り薬使つて寝たら、  
明日には治つてるし」

「ふふつ、あんまり無茶しないでよ」

何嬉しそうにしてんだよ氣持ち悪い奴だな

「はいもういいよ、ちょうど薬がなくなりそうだし補充しつかから僕が持つて帰るよ」

「ありがとう、さてもう帰るか腹減ったしな」

「うん」

こんな感じで日々を過ごして、脳天氣と言われたらそんかも知れないが打つ手がないんだからしょうがない、来るべき日まで出来る事は少ないのだ

街までの道のりはわかつた事はわかつたけど、無理ってのがわかつたのだ伊達にクルタ族が秘境に隠れ住んでる訳ではなかつたたつた一度だけ、クラピカの親父さんに頼んで大人達と一緒に街の用事にくつついて行つたけど

道のりがあまりにも険しい、街に付くまで猛獣や魔獣に数回出くわすし、体力的にも厳しいのだ

3日間山超え谷超え歩き続けねばならん、途中に魔獣などを警戒しながら交代を挟んで休憩仮眠を取りながら街まで進む、一人では100%無理だ街まで辿り着く前に死ぬ

クラピカが11歳になつてもう3ヶ月すぎた、恐らく旅団襲来まで一年ないだろう

その期間体力作りのみに励んでもギリギリだ、だがクラピカスタークー作戦より確率が高いかもしけないどうする決行するべきか？ 明らかに不可能なレベルだが悩むどころだ

もう時間がないな、こんな時こそ冷静になるべきだ混乱して空回りしてバツドエンド一直線はマズい

失態が多すぎる

一つは念を覚えられなかつた事、これはかなりデカい念は身体能力

の底上げが出来るこれさえあれば街まで逃亡作戦が楽になつただろつ  
二つめは環境に慣れ、クルタ族の皆に情が移りすぎた事だ、心つて  
のはどうしようもない、頭では見捨てる事前提で進めてるが如何せ  
ん罪悪感がかなりある、人間非情になるのは意外と難しい

実際クルタ族が皆殺しされた時それを見たらどうなるか自分でもわ  
からない、想定外な事が起きる可能性もある

3つめはクラピカと予定以上に仲良くなりすぎた事だ、二つめの失  
敗と似てるが意味合いが違う

ストーカー作戦の後俺とクラピカが生き残れば、クラピカは原作通  
り蜘蛛抹殺に人生の大半を注ぐだろう  
そんなデンジャーな奴に付いて行くつもりはないし、物語の原点【  
ハンター】になるつもりもない  
クルタ族同様にクラピカは見捨てる気満々だったけど、今は実際そ  
うなつたら見捨る事が出来るかどうかはわからない

甘いと思うかもしれない自分でもそう思つてゐ、だが如何せん感情  
が爆発しそうな感じだ

鍛錬でもどうにもならん、精神面は人間鍛えようと思つても難しいな  
まあるようになるか…

## サン話（後書き）

次回で話しが進みます

屍

狂いそうになる、吐き気が止まらないこれが人間だつた者なのか  
人の形さえしてない腹から内蔵が飛び出し死んでいる、頭が潰され  
グチョグチョのスープみたいのが倒れこんだ地面を染める死体

赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤

目の前には誰かの胴体が転がり、上から先は誰だったのかもわからぬ  
狂いそうになる子供も大人全てが平等に死が訪れ全てを赤色に染める

# ない死体

曲がってはいけない方向に関節を曲げ悲痛の形相をしている死体  
どれもこれも壊れている、全てに死体には目玉がない、目があつた  
はずの部分はポツカリと窪み眼底から流れる真っ赤な涙が顔を赤く  
化粧している

少年の1人が叫ぶ魂から絞り出したかのような慟哭、怒氣、悲痛

感情のすべてが混ざりあつた吐き出す言葉は獸のよくなき粗

俺は動けない全身が震え、脳がフリーズしたように停止し腐ったかのように何も考えられない、響き渡つた少年の叫びさえ耳まで届か

ただただこの目の前に広がる血の臭いが充満した地獄に囚われるだけ

「アアアアアアアアー！！」

クラピカの叫び声をあげ、もつれる足を懸命に動かし前に進む姿が俺をかすかに正氣を取り戻させた

「ク、クラピカ！」

「父ちゃん！ 母さん！」

クラピカが大切な家族がいるはずの我が家に向かう  
クラピカの戸惑いが見てるこちらにも伝わってくる、涙でグシャグ  
シャの顔を見て、なぜか俺は混乱していた脳が正常に戻る  
冷静になれ冷静になれ！

心臓の鼓動が世界中に聞こえそつそつなぐらじ高鳴つて、落ち付け  
まず深呼吸しろ

10回程深呼吸をし目を瞑る五感の一つを消した事で、嗅覚が無駄  
に研ぎ澄まされむせかえるような生々しい血の臭いが俺の鼻孔を抉  
るようつに感じられる

「ふうー……」

最後に大きく息を吐き出し、この現状を判断する  
わかつっていた、何時かこんな日が来るとは理解していた

耐えられないこれ程までにキツいのか、口の中が胃液で満たされ今  
にも胃の中の物を全て吐きそうになる

こ こ ろ セ い し ん が 壊 れ 崩 壊 す る

確かにこれは歪んでもおかしくない激情で身が焼かれそうになる  
取り敢えずクラピカを追わねば、今後どうするか今は決められない

始まり

「おーークラピカ！ 本当にこいつら辺りにあるのか？」

「多分」

「オイ、多分かよ」

とうとうクラピカが先月、12歳になつた内心ビクビクだ  
街に逃げるとか無理、あれから体力を重点に置いて訓練したがビック  
クリするぐらい無駄だつた

最後に残つた案クラピカストーカー作戦が俺の生命線だ、もう自分  
でも気持ち悪いぐらいクラピカに引っ付いている  
別にクラピカは文句言つたりしてこないから複雑な気分だ、いつそ  
気持ち悪いつて言ってくれればいいのにね

「もつと森の奥にあるんじゃないかな？」

「どうだろ？ ここのにはなさそうだから行つてみよつか

今何してるかと言つと、クラピカが母親の誕生日が近いからそれ  
のプレゼントとして特別な物をあげたいと言つので、常時くつ付いて  
る俺をお供に森まで探しに来た。

お田端はなびばなでは花火花と言う特殊な花で時折花粉が火花のようになるら  
しくそのままはとても美しく、めつた見つからない希少な物らしい  
クラピカが過去に村から父親と薬草探しに出た際見かけた記憶を当  
てに協力して捜索中

「流石に村から離れすぎたんじゃないかな？」

「「Jめん、でも母さんの誕生日は明日だから今日中に見つけないと……」

「まあいいけど、日が暮れる前までだぞ、おばさん達を心配させたら意味ないしな」「わかつてゐよ」

どこか沈んだ面持ちのクラピカの背をポンッと叩く

「大丈夫だつて、俺も探してんだし見つかるつて」

「ふふつ、ありがと」「う」

「この辺りはもう探したから、少しだけ奥に進むかここから村の距離だと走つたら30分ぐらいで付きそつだし」

「そうだね」

「よし行くぞ」

あんな事言つたが、心中では見つかんないだろつて思つて離れたと言つてもここらあたりはまだ村のテリトリーだ  
探す前にどういう物か調べたが結構な値がするため、既に大人が刈り尽くして街で売つた可能性も高い

見付かれば御の字だな、クラピカの母親には世話になつてるしな

結局俺とクラピカは日が暮れる寸前まで探したが、目的の物は見つからなかつた

何かいたたまれない氣分だ、ないものはじょうがないじビツじょうもないのだ

少し離れた場所のクラピカに声をかける

「おーい！ もう見つからないから帰るぞ！」

森の中に俺の声だけが響きわたる、なぜかクラピカの返事が聞こ

えて来ない

「クラピカー！」

「ア、アルベル！」「こっち来て！」

「いたのか、ちゃんと返事しろよビックリしただろ！」

クラピカの声がする方に駆け寄る

そこで見たのは、一瞬声を失つてしまふぐらいに美しいものだつた花がまるで線香花火のようパチパチと音を立て夕暮れの光がありながらも、力強く火花を放つていて幻想的な光景に思わず見とれてしまう

「……すげー」

「……うん」

「どうするこれ？ 持つてかえるか？」

「いいや、母さんには違う物渡すよ」

「だな……」

クラピカは優しいね、俺単独なら問答無用で持つていくんだがクラピカがこういうなら仕方ないか

「やべ！ 日が暮れるぞ」

「急いで帰ろー！」

俺達は一人村まで駆け出した、収穫がなかつたにもかかわらずクラピカの笑顔はどこか満足げに微笑んでいる

俺達が村に辿り着くまでクラピカの笑顔は消える事はなかつた

そう村に辿り着くまで、クラピカは何も変わらない日常がそこにあ  
ると思つて

## よん話（後書き）

旅団襲来といつことでこんな感じになりました  
さすがに田玉えぐつてクルタ族皆殺しイベントは「メーティ」にはでき  
ませんでした  
後2話ぐらいシリアス（笑）になってしまいますので苦手な方申し  
訳ありません  
また直ぐに1～3話みたいな感じに戻りますので

クラピカが死んだように眠っていた、寝ているその顔は安らかとはほど遠い、時折呻くように声をあげ苦悶の表情を浮かべている。

クラピカと俺が村に帰ってきた後、クラピカは村の広場や道に転がる大人達や昨日まで一緒に学び遊んだ子供達の死体を見て狂ったよう叫んだ

転がった死体を見ないように脇田もふらずに走り出した  
家の傍にそれはあった

クラピカの父親は母親を庇うように倒れこむ無残な姿だった、人間の尊厳を踏みにじりボロボロにされ両目を抉られ死んでいる  
最愛の家族の変わり果てた姿を見たクラピカは、再度叫び意識を失つてその場に倒れこんだ  
俺はクラピカを抱え家まで運び布団に寝かせる、ソッとクラピカの頭を撫で外に出た

俺はいないと思いながらも生き残りがいかないか村を歩き回った  
死んでいる

この世界の色々な事を教えてくれた先生も  
俺を育ててくれたおばさんも  
みんなみんな死んでいる

罪悪感で胸が押し潰され壊れそうになる

知っていたから俺はこの結末を知つていながら見捨てた

「……チツ」

俺は何を考えた？ 助けられると思ってたのか？

俺如きに何が出来たんだ、原作知識ひけ散らかせて原作を壊す？  
助ける事を面倒くさいとか思つてたくせに？

軽く考えてすぎてたのかもしれない、もし自分なら耐えるとか楽観的に考えてた

甘かつた、めちゃくちゃだこれ程にキツいのか？  
もう遅い何もかも遅い……

「ハア」

溜め息を吐く

取り敢えずみんなを埋めよう、このままじゃああまりも惨すぎる  
今出来ることはそれだけだ、謝罪とかじやない自分がやりたいから  
やるだけだ

クルタ族のみんなが使っていた、農作物を作るための用具がある小  
屋に行きスコップを持ってくる

スコップを片手に広場まで行き穴を掘る作業に取り掛かった

手が痛い俺は何時間穴を掘つていたんだる、空を見上げたもう夜が  
明けそうだ

早くみんなを埋めないとダメだ、クラピカにこれをやらせてはいけ  
ない

掘つた穴から出てスコップを投げ捨てる

まず広場にある死体を一力所に集めた、吐きそうだ今みんなの亡骸  
を物を扱うようにした俺に

「すみませんでした」

なぜ謝つたのか自分でもわからない咄嗟に出た言葉がそれだった  
みんなが俺を見てる気がした、瞳がない筈なのに怖いと思つてしま  
つた

感情を消しみんなの亡骸を淡々と埋める、泥と血の鉄の匂いが纏わりつく

作業に没頭してると不意に後ろに気配を感じ振り向く  
振り向いた先にいるのは、目が虚ろで今にも倒れそうなクラピカだ  
俺クラピカにどんな言葉をかけていいのかわからない、ただクラピ  
力を見ているだけ

「……みんなはどう?」

弱々しくそう呟く声が俺の耳に届いた  
答えられない正解がわからないから

「……ねえ、答えてよアルベル

俺はクラピカに近付きクラピカに言った

「寝てる」

何を言つてるんだろうか

「答えてよ、アルベル!」

「落ち着け答えるから、取り敢えずお前の家に行くぞ」

何か言いたそうなクラピカだが黙つて俺に付いてきた  
クラピカの家にあがるとまずクラピカを座らせ、その正面に俺が座る

「何か飲むか?」  
「いらない……」  
「そつか……」

暗い雰囲気だ、重い空気が俺とクラピカにのし掛かる  
何て言つたらいいものか……

「みんな死んだの?」

クラピカがピンと張り詰めた空氣の中発言する

「……ああ、皆死んだ」

「誰が? どうして?」

「わからない」

嘘を付いたそりゃった方が良いと思つたから

「父さんと母さんは?」

「広場だ……、まだ埋めてない」

「そりゃなんだ……」

「あとは俺がやるから、見ない方がいい、寝てろよ倒れそうだぞお前」

「……いいよ、手伝う」

「いいから寝てろ」

「僕ならもう大丈夫だから……」

強がりを言つクラピカが痛々しい、見ていいられない

二人で広場に行き、黙々と皆を埋める

村中にある亡骸を集める事は俺がやつた、クラピカにさせたくなかつたから

「わかった、なら頼む」

「……うん」

クラピカが自分もやると言い出したが、役割分担だからと書いて広場に留ませた

ずっと取るものも取らずやっていたから喉が乾いた、不思議とお腹は減らない

飲み水がある場所に行く、水がはつてある大龜の中をのぞき込んだら俺が写っていた

これが俺か？ 目元には隈が出来服も泥と血が変色し真っ黒になつた物が全身に付いている

……気持ち悪いな俺

頭をかこうと手を挙げたその手に映つた俺の手は服と同じよつて真っ黒だつた

ギュッと手を握り締める、血の匂いがする

もう一つの甕に手を入れ「シゴシと手をこすり合わせる

「血つてなかなか取れないんだな」

クラピカ

目が覚めた、何時も道理の天井を見上げる

昨日の事は夢だつたのか？

最悪の夢だつたアルベルと森から帰つてきたら

みんなみんな死んでいた、父さんも母さんもみんな死んでいた

「おはよー」

自分の部屋から出て何時ものように家族に挨拶する

返事が返つて来ない、毎朝自分より早く起きている母さんと父さんがそこにはいなかつた  
ガランとなつたテーブル、作りかけてそのまま放置したように乱雑に置かれた食材が調理場にあつた

「あれ？」

僕は不安になつて父さんと母さんが寝て いる部屋を覗く  
やつぱり誰もいない

まさか

嘘だ

夢じやなかつたの？

なら外にあれがあるはずだ、昨日見たアレが  
家から飛び出し、外の光景を見て氣を失いそうになつた  
父さんと母さんはいない、それでも夢じやなかつた事を強引に知ら  
される目の前の現実

壁に叩きつけられ放置された死体、あちらこちらに散らばる人だつ  
た物

「アルベル？」

大事な友達を思い出し言葉に出す

アルベルまでいなくなつたら、僕は僕は  
隣の家に駆け込む

おばさんもアルベルもいなかつた……

怖い世界にだれもいない一人ぼっちになつた気がした

足が重いゆっくつと歩く行き先は広場、朝はよくアルベルとあの場所に行くから

もしかしてアルベルがいるかもしない、もしいなかつたらどうじょう

そんな事考えながら広場を見渡せるところまで行くと  
広場はいたるところに土が盛られ、地面が掘られていた  
その一角で何か動く物を見つけ目を凝らせてよく見ると、アルベル  
がスコップで地面を掘っている姿だつた

アルベルに急いで駆け寄りたかった、でも無理だつた  
アルベルの近くにこの距離でも嫌でもわかるくらいに無造作に置か  
れた、みんなの亡骸

何をしてるのか何をしようかなんてわかってる、アルベルはみんな  
を埋めてあげようとしてるんだ  
震える足を無理矢理動かしてアルベルの元に急ぐ

アルベルが掘つた穴から出てきて、僕の気配に気付いたのかこち  
に振り向いた

何時ものアルベルなら、不自然な笑顔を浮かべ僕にくだらない事や  
憎まれ口を叩くだろうが

今はただ僕をジッと見てるだけ

アルベルの服は泥や血で真っ黒に染まり、目は充血し隈ができ疲労  
が貯まつてゐるのがわかつた

タフなアルベルがこんなになつてるのが信じられなかつた、どれく  
らいこの悲しい作業を独りでやつっていたのだろうか?  
ごめんなさい、そう言いたかつた

でも僕の口から出たのは別の物だつた

「……みんなはどう?」

違うこんな事を言いたかった訳じゃない

アルベルは目を細め俯いた、すまなさそうにするアルベルの顔を見て自己嫌悪する

「……ねえ、答えてよアルベル」

「ごめんなさい

アルベルが僕に近付き弱々しく呟く

「寝てろ」

こんな時ここまで僕の事を心配しているのだろうか？

「答えてよ、アルベル！」

「落ち着け答えるから、取り敢えずお前の家に行くぞ」

あとを付いて行く

無言で前を歩くアルベルが僕には別人みたいに見えた  
僕にとってアルベルは友達であり、産まれてこの方ずっと一緒にいたから兄弟みたいに思つて、笑っちゃうけど頼り無い兄つて感じだ  
何だろ言葉には言い表せない別人のようと思えてしかたなかつた

僕の家に付くと促されるまま椅子に座り、テーブル越しにアルベルが正面に座る

アルベルからみんなや父さんと母さんの事を聞いても  
信じられない程今の僕は落ち着いている、多分アルベルのこの顔を見たからかもしれない  
どこを見ているのかわからない、僕を見てるようで見ていないどん  
よりした瞳

僕はバカだ、混乱してアルベルをせめて何をしているんだえろう  
アルベルは僕を心配して手伝いを断つたんだ、でもこれ以上僕はア  
ルベルに苦労をかけたくない

見ていられないからこんなアルベルを見……

友達だからもう僕にはアルベルしかいないから

「僕ならもう大丈夫だから……」

渋々アルベルが頷くと、2人で広場に向かいみんなを埋葬する  
埋める最中、僕の中に沸々と煮えたぎる感情があつた  
クルタ族の誇りも何もかも踏みにじり汚しただ奪い、殺した人間  
此処まで惨い事が出来る人間がいるとしたら、僕はそれを許せるの  
だろうか？

わからない……

今はみんなを埋めてあげよう

それからの事はアルベルと相談して決める  
でも一つだけ決めた事がある  
——強くなろう

## 今　話（記載せ）

今回の話は自分で書いておきながらおちやくぢやです  
突つ込まれてもすみませんとしか言えないです、はい  
話しも進んで進んません

クルタ族が俺とクラピカを残し滅びた日からおよそ1ヶ月の月日が流れた

俺も大分落ちき、広場に花を飾り付け供え、クルタ族のみんなを弔つた、生憎お経何て知らないしクルタ族にそんな習慣はない、手を合わせ祈るだけしか出来ない

今も広場に花を植えている

自己満足なのはわかってるんだけどね

あれから村はそこそこ綺麗になつた、クラピカと協力して村のあちこちを清掃し、ここで村人が大量虐殺された場所とは思えないぐらい片付けた

流石に壊された民家などは直せないから放置してる、そんな技術は俺にもクラピカもないから

それに俺は今ここに留まるかどうか迷つてている

俺の【目的】はここでは達成できない、だからこそ迷つている

俺の目的にはクラピカが必要だし、情も移つた見捨てるつもりはこなればつちもない

当初のクルタ族として生活してた時とは、俺の思考は全く別物だ、生き残つた後好きなようにこの世界を楽しむこれの優先順位が変わつただけ

だから今は下手に動けない、理由はクラピカだ

クラピカの過去は原作でもH×Hの主人公ゴンと出会う前どういつ生活をし、どういった経緯でハンター試験までたどり着いたかが書かれておらず一切不明

懸念となるのはそれだけじゃないクラピカは今現在、クルタ族を滅ぼしたもの達が誰かすらわかつていない

これは俺の存在で歴史が変わったとは考えたが正直微妙  
俺がいないとしてクラピカがクルタ族滅亡が発生し生き残り、村に  
帰つた後辛うじて生きていた瀕死の人間からこれを行つたのは幻影  
旅団と聞いた、だがこれは有り得ない  
闘い負け目玉をえぐり出された人間が生きていたとは思えないからだ  
女子供も容赦なく、ご丁寧にトドメまでさしてやがるし

ならどこでクラピカは幻影旅団の事を知つた？

クルタ族以外の第三者から聞く方法しか残されていない、ならどこ  
で？ 誰に？ クルタ族が滅ぼされた事を知つてゐるうえ、これが  
旅団の仕業と知つてゐる者？ そんな奴がいるのか？  
情報がなさすぎる、所詮俺の想像でしかない

クラピカ行動を考えてみるか……

俺がいなかつた場合、クラピカはどう動く？

まずクルタ族滅亡が終わつた後、暫くここに留まり今と同じように  
クルタ族のみんなを埋葬するだろう

問題はその後だ、この懲劇を引き起こした犯人を突き止めようと行  
動するだろうか？

俺の推測だと時間を置きクラピカは行動に移すはずだ

俺に黙つてはいるが怒りを心に秘めている、ただその怒りのぶつけ  
先が定まらず考えが纏まつていないだけ、どうするか決まつたら行  
動を起こすのは間違いないと思う

もしクラピカの考えが纏まり懲劇の犯人を追おうとして街まで下り  
る、これは現状不可能

クラピカには街まで単独で下る程の体力はない、しばらくこの村で

体を鍛えてこの場所を出る事になるとか？

仮に街におりてその後どうする？職もない稼ぎもないガキがそう簡単に街で生活は出来る程甘くない、ストリートチルドレンにでもなるのかクラピカが？

有り得ないあまりにも計画性がなさすぎる

うーむ……わかんねえ

関係なくね？ クラピカの原作までの人生の道乗りとかもう関係なくね？

ダメだダメだ、少し思考がおかしくなった、落ちつかねば

ん？ 待てそうか、クラピカが街まで行かずに幻影旅団の情報を聞く方法はある

先入観に捕らわれていた、可能性があるじゃないか、ゼロではないんだ……

この村に誰かが訪れる可能性が、クルタ族として12年この村にいたがこの場所にクルタ族以外の人間は来なかつた  
だから頭から無意識に外していた、ありえなくはないんだ現に幻影旅団は現れた

ならそれ以外の人間が来る可能性はある……

だがそんな人間がここに来る理由はなんだ？

### 1、幻影旅団と同じ理由？

ありえなくはないが可能性は低い、もしそんな人間が来たらクラピカは原作に存在しない

### 2、何らかの調査で偶然立ち寄る？

今さらこのタイミングでクルタ族の集落の近くまで来る可能性はあるのか？

何か引っかかるぞ、見落としは何だ？

俺は鞄から、原作知識を書き綴った手帳を取り出し、幻影旅団の項目を読み直す

——これか

だとしたら第三者が幻影旅団が殺したとは分からぬものの、クルタ族が全滅したと推測する人間が現れるかもしね

かなり低い希望的観測

クラピカの原作のあれに対する崇高のような考え方  
合点とまで行かないが、あるかもしね  
賭けるか？ この可能性に……

「ふうー」

溜め息が増えたな笑えないぞ、弱気になつての証拠か  
俺は弱気になつての暇はない、思考しろ考える事をやめるな

つい頭をかきむしってるとクラピカが俺に声をかけてきた  
一月前よりクラピカは少しだが痩せてしまつた気がするな、だが目  
からは決意を持った強さが感じられる

「手伝う事ある？」

「いいよ、こつちは終わつたから」

「そう、ちよつと休もう」

広場で俺がやつてた花を植える作業を手伝いにきたんだろう  
俺とクラピカは広場にの片隅に行き腰をおろす

「アルベル……」

「どうした？」

「これからどうするか話し合おう」

「わかった」

いよいよか……

「クラピカはどうしたい？」

「僕は……みんなを殺した犯人を許せないんだと思つ……」

「ここは僕達の大事な場所だけど、ここにいても答えはないと思つ

から」

「それで」

「街まで行こうと僕は考へてる、アルベルは？」

やつぱりか……案外早かつた、どうする？　ここに来て俺の存在が弊害を生んだかもしれない

「俺も同じ意見だけど、まだその時じゃないと思つ  
ここで街まで2人共単独で街まで行けるようになるまで鍛えるべきだ」

「それだと、食料の問題とかどうするの？」

家畜はあの時の騒ぎで全部逃げちゃたし、食料庫にある物を使つたとしてももつて2カ月、森の中で狩りをして過りすにしてもいざれ限界が来るよ？」

そりやあそだ

俺は賭けに出てるから今のところ、ここから離れるつもりはないこれはクラピカのためでもある  
どうやってクラピカを説得する？　いつモト下座するか？

「アルベル？」

「クラピカもわかってると思うが、俺達2人だと街までつく前に死ぬぞかもしれないぞ」

「勿論わかってるよ、だけど……」

「クラピカの気持ちは分かる、だけど今は無茶をしないで欲しい、せめてお互い協力して街まで行けるぐらいまで鍛えよう」

クラピカはぐつと拳に力を込めている

「……」

「頼むクラピカ、俺はお前を失いたくないお願ひだ」

初めてかもしれない、クラピカにこうやって真剣に頭を下げるのは

「顔を上げて、僕もアルベルを失いたくないんだ  
気持ちは一緒だよ、鍛えようまた2人で一緒に」

頭を上げクラピカの顔をじつと見た

「でも約束して欲しい、いざれここから出るつて」

「ああ、約束する」

クラピカが俺を観察するかのように見た後、ゆっくりと立ち上がった

「何だよ」

「フフツ、何でもない」

久しぶりにクラピカが笑った

「つか腹減った」

「今日はアルベルの料理する番なんだから作つてよ」

「はあ？ クラピカが作れよ、俺料理苦手だぞ、前作つたらマズいつて言つてたる」

「順番は守るべき」

「わかったよ、変な物作つてしまふかもしれんから、お前も手伝つてくれ」

「しようがないな、まったくアルベルはもう……」

「何だその言い方ふざけるんじゃないよ、ワザとマズい物作つてやろうか？」

「はいはい」

「い、こいつ……」

「早く行こう、時間がもつたといいからね

「ぐつ、わかつたよ行くぞ」

「うん」

少しだけ前の日常が戻つた気がして俺はホッとした

これでいい何とか目的は達成できた、クラピカを失いたくないのは本心だしな

多分だが俺の存在が原作前とはいえ弊害が出て時間が歪んだ

おそらくだがクラピカの行動と気持ちの整理が早くなつたはずだ  
俺がいなかつたら皆を埋める作業、村を綺麗にする作業、皆が死に  
感情もままならない状況でこれを1人でやつたら、倍の日数はがか  
かつたはず

だから合わせないといけない時間を、俺が賭けた博打に勝つために  
俺が賭けるか博打は手帳の幻影旅団の行動を読んで思い付いた事だ

『団長は一頃り愛でると全て売りはらつ

そう、幻影旅団は盗品は全て売り払うのだ

盗品を全てだ、クルタ族の緋の目も例外ではない全てだ  
どういったルートで売り払われるのかわからないが、数十人分の眼  
球を売つたら間違いなく異変に気付く者も出てくるはず

その原因を調べる者がいたとしたら?

馬鹿な考えだこれは推測でもないただの都合のよすぎる妄想にすぎ  
ない

もしここに「ハンター」またはそれに通じる者が来ると言つ妄想

クルタ族という特殊な民族の事を知り、ここまで来れる知識と身体  
能力

これは俺の希望であまりにもアホな希望的な物だが、これに賭ける  
原作でクラピカが死なない事実、クラピカが原作で見せたハンター  
の崇高な思い

クラピカの崇高な思いはどこで見聞きしたか? その場にハンター  
がいたのではないかという妄想

馬鹿みたいだが、俺はこれに賭けた

あまりにも今の俺達はジリ貧だ、今の所街に行けない以上、俺とクラ  
ピカは動けないなら鍛えクラピカの本来の時間軸まで賭けて待つ

まあ来なかつたら来なかつたでしょうがないさ、次の事を考えれば  
いい

## ひく話（後書き）

今年の更新はこれで最後です  
正月はバタバタしますので更新は遅れます  
それではよいお年を……

左からの木刀の一振りを寸でかわし、アルベルは距離を詰める手加減なしの左の手刀をクラピカの首目掛けで突き出す、わざとなのか寸前でクラピカはそれを軽く避け、伸びきった腕が戻りきる前に、右手に持つ木刀でアルベルの脇腹を叩きつけた

「グツ！」

アルベルはクラピカの追撃を危惧し後方に大きく飛び退く

「甘い！」

それを予期していたのかクラピカが前進し、木刀の間合いを生かして左からの突きを放つ

先ほどの脇腹のダメージのせいでアルベルはうまく体を動かす事ができず、木刀の先端がアルベルの腹部にめり込み表情を歪ませる

「ツウ、ガハツ！」

痛みで膝を付きそうになるのをこらえ、一步踏み込み自分の間合いに入ろうとする

が、すでにクラピカは右手に持つ木刀をアルベルの首に添えていたアルベルは勝敗を理解し両手を上げるやや遅れクラピカが両方の木刀下ろした

「僕の勝ちだよね？」

「あーちくしょ、素手なら勝てるのに……」

「得意な武器を使うのは当然だよ、アルベル」

フフンと鼻をならし白慢気に俺に言つてくる  
くそ、コイツ性格曲がって来てないか？ 昔は俺に殴つたりする事  
すら躊躇したり、すぐに謝つて来たりしてたのに  
これが成長か……

村からちょっと離れた修練場でクラピカと組み手をしていたが、俺  
は何度も負けている

わざと言つた通り素手なら負けないんだがね！

「もう一回だ！」

負けてられないのだよ！ じつといづらいプライドがあるので！

「いいよ」

なにその余裕？

「ぬわああああ！ パアパアスゥウ！」

雄叫びをあげ俺はクラピカに飛びかかった

負け越しました、7戦1勝6敗

1勝はクラピカのスタミナがなくなつて勝てただけだから、全然嬉

しくない

ダメだ勝てない、真剣を使わず木刀を使っていたが、本来の得物の真剣を使ってたら俺は全敗していただろう

「イタいッ、優しく塗りたまえ！」

「はいはい、まったくもう……」

で、今俺は半裸でクラピカにクラピカ印の塗り薬を、背中のいつの間にか怪我した部分に薬を塗つてもらつてゐ  
ちょっと気持ちいいと思つてしまつ自分がイヤだ……

「はい、出来上がり」

「おう」

脱いでいた服を着て立ち上がる、体が痛い

「アルベルつてさ、もうちょっと闘いながらでも周り見た方がいいよ」

「注意散漫つて事か？」

「うん、アルベルは避ける事に専念するあまり

位置的に不利な場所に追い詰めやすいんだ、僕が武器持つてゐる優位性もあるけど」

「もしかして俺の動きつて読みやすいのか？」

「そんな事はないと思つ、ずっとアルベルと稽古してゐから動きのパターン覚えただけだよ」

「イツ、サラツととんでもない事言いやがるな、俺とばっかりやつてゐとは言えそんな事出来るつて凄い事何じやね？  
やはり原作での天才っぷりはマジ物か……

「アルベルも何か武器使つたら? 避けるだけじゃなく、受けを使つたら戦闘に幅が出るよ」「武器ねえ……」

使いこなせない物を使うのはね、逆に混乱しそう何だよな  
とりあえず後で倉庫を漁つてみるか

「戻るか、日が暮れちまつた」

「うん」

修練場からクラピカの家に戻る最中とある異変に気付く、村の入り口から近い民家に灯りがうつすらともつてゐる  
クラピカも気付き警戒するように目を細め、腰に差していた木刀を抜き、ギュッと手に握りしめた

クラピカの雰囲気が変わる、軽い興奮状態になつたのか瞳がゆつく  
りと真っ赤にそまり、緋の眼に変わる

俺の賭が勝つたのなら、侵入者とのイザゴザは控えないといけない、  
クラピカを宥めねば

小声で話しかける

「落ち着け」

俺の言葉がクラピカの耳に届いていない、灯りの付いた民家をジッと睨み付けてゐる

憶測だが、クラピカの頭の中での日の懺劇がよぎつたのかもしない、トラウマになつたからしがないとはいへ、今は不味い  
クラピカを何とか落ち着かないとダメだ

俺はガシッと片手でクラピカの頭を掴み、強制的に俺の方を向かせる  
クラピカがハツとした表情になり、戸惑つた様子の顔で俺を見る

「クラピカ」

「ア、アルベル……」

「大丈夫だ、俺は傍にいるだろ？ が、どこにもいかねーから」

なるべく優しくゆつくり喋り、クラピカを真つ直ぐ見て伝えた  
スツとクラピカの瞳の色が元に戻つて行く  
はあ良かつた……

「だから落ち着け」

「……ごめん」

「気にはすんな」

クラピカが掴まれた頭がくすぐったいのか、顔をフルフルと揺らす  
俺も流石にやつてる事が気持ち悪くなつて手を離した

「あつ」

何、名残惜しいみたいな顔してんだ気持ち悪い奴だな、ぶつ飛ばすぞ

「何だよ、落ち着いたなら何か言えよ」

「えーと、どうしようか？」

「まあいい、あの家に誰か居るのは間違いないだろ」

「そうだね、あそこは僕達使ってなかつたし」

どうする？ クラピカにあそこにいるのは敵じゃないかもしれない

から行こうぜ、とは言えん

だが何としても接触する必要がある、しかしクラピカにどう言えば

いい？

仕方ない俺一人で行くか？ もし賭けに負け敵だつた場合どうする？

埒があかないぢひりにせよ会わないと確認しようがない、行くか行くしかないか

「アルベル」

「どうした？」

「僕は接触は避けるべきだと思つて、この集落に人が来る事情がわからぬ

もしみんなをあんな田に呑ませた奴がここに戻つて来たのなら僕達の命はない

信じたくないけど、父さんや大人の人達に勝つたぐらいだし、到底今のアルベルと僕じやあ何の抵抗もできずにやられるのが落ちだよ、

悔しいけど今だけここから離れよつ

マジ？ 原作クラピカなら問答無用で突っ込んで行きそつなんだが

とんでもなく冷静に判断しやがつた、しかもかなりの正論だし俺の存在でクラピカの思考の方も変化したのか？

「ちょ、ちょっと待て」

「何？」

「俺は接触するべきだと思つ

「どうして？」

「どうしようつ

「勘……」  
「はあ？」  
「だ、だから勘だつて」  
「何言つてるの？」

クラピカがお前何言つてんの？ 死ぬの？ つて言いたげだ仕方ない強行策だ

「俺が1人で行つてくる、ここで待つてる」

なぜかクラピカが下を向き全身をワナワナと震わせる顔をあげカツと目を見開き俺を怒りの形相で睨む、その瞳は真っ赤に染まりまたもや緋の眼の状態になつていた

「ふざけないでよ！ アルベル！」「えつ？」

クラピカが村中に響くよつた大声で怒鳴り始めた

「1人で行くつて何だよ！ 僕の傍に居るつて言つたばっかりなのに……、それに！ もしアルベルになにかあつたらどうするだよ！ そんな事になつたら、アルベルまでいなくなつたら、僕はぼくは……」

クラピカはひとしきり怒鳴り終え後、うつて変わつて落ち込み出したやつちまつた、クラピカがここまで俺の事を心配すんのか……予想出来なかつた事じやなかつたんだが、単純に俺のミスだ

「すまん、クラピカ俺が悪かつた」

クラピカに頭を下げる

「あつ、こんな時にこつちこぞーりめん

「いいつて

何か変な空氣になつちやつた、どうひみつ……

あれ？

何か視線を感じる

視線を感じた方向に目をやると、数人の人間がこちらを見ていた  
そりやあそうか、あんなにデカい声出してたしな

## ナナ話（後書き）

次の話でオリキャラが出来ます  
何かクラピカがおかしな事になつて來た……

## まい語（書きや）

オリキヤラ難しいです

博打は俺の勝ちだった。

有り得ないぐらいの大勝ち。

気味悪いな、クルタ族に生まれ変わつて、世の中そんなに甘くないつて、現実を叩きつけられたばかりだ。

勘ぐるのは当然か、ご都合主義だから、ですんだらいいんだけどね。クラピカの家の一室で、そんな事を考えていると、ゆっくりと扉が開き、クラピカが部屋に入つて来た。

「夕御飯できたよ」

「おう」

クラピカの後を追つて部屋を出ると、そこには男が2人いる。出会つてまだ3日しか立つてないのに、堂々とした姿でくつろいで、クラピカ手作りの料理を食べている。

1人は身長2M以上ある筋骨隆々の大男だ。顔もめちゃくちゃ怖い、睨まれたら逃げ出しそう。

もう1人はこの場にそぐわない、目が痛くなるぐらいの明るい紫色の上下のスーツに紫色のハットを被つた男だ。なぜか、俺を見て薄気味悪い笑みを浮かべている。

「アルベル君、申し訳ありません。お先させてもらつていますよ」「いえ、自分の事は気にしないで下さい。テルミさん」

全身紫の男がテルミ。

丁寧な物腰と話し方をして、一見好青年つて感じなのだが。表情があまり変わらない、常に顔に貼りついたような笑顔が気味が悪い。正直この人にはまだ警戒がとけない、不思議な事だが、俺を観察し

てる節があるんだよな。

それに初めて会った時、俺を見て能面のみみたいな顔が、ほんの一瞬驚いていたように見えたのだ。

「早く座らんか、嬢ちゃんが作った飯が冷めてしまつぞ」

「はい、あとクラピカは男ですよ。バレチノさん」

「……ああ、そうかスマンな」

巨体で髭面のオッサンがバレチノだ、口汚くなる時もあるが悪い人ではない。顔怖いけど。

俺も料理の置かれているテーブルの席に座る。

「クラピカ、いただきます」

「うん」

出された料理を一口食べる、相変わらず美味い。

俺の代わりに、毎日作ってるからな。

最初は交互に作ってたけど、俺がサボりまくつてたら、自動的にクラピカが料理係りになつていた。

たまに文句言つてくるが無視、俺には料理の才能はないからな、無駄な努力はしないのだよ。

何だかんだ言つても、キッチンと作つてくれるし。

しばらく4人で黙々と食べていると、クラピカが箸を置き、バレチノの方を見る。

「バレチノさん、話してください、父さん母さんみんなを殺した人の事を、

今まで言つてくれなかつたんですけど、知つているんですよね？」

クラピカの嘘は許さない、といった視線に、バレチノは箸を止めてクラピカの目を見返した。

「気付いておつたか、鋭い子供だな」

「はい」

バレチノは僅かに眉間にしわを寄せ、一度小さい溜め息を吐き出す。「わかつた、その前にせつかくの料理を食べ終わってからにじょつ、気分のいい話しじゃないからの……」「……わかりました」

やつとか、やつと先に進むのか。

原作前の話しがわからないとは言え、こんな賭けに出たんだ。負けた事も想定して色々考えていたが、本当によかつた、無駄になつて。

俺の馬鹿げた妄想が、嘘みたいに見事に的中した。

最初の自己紹介みたいなので言つてたが、バレチノとテルミはハンターだ。

ハンター証も見せてもらつたけど、初めて見たから本物かどうか分からぬが、嘘を言つてる風ではなかつた。

テルミは胡散臭い人だが、バレチノの知り合いらしく、一応ちゃんとしたハンターらしい

バレチノがクルタ族の集落まで来たのは、俺の予想とはちょっと違つた。

遺跡ハンターのバレチノは、世界中の遺跡があるところに、年がら年中飛び回つてるらしく。

数十年前、クルタ族の集落から一番近い街に滞在してゐる最中に、クルタ族の大人達と偶然出会い。

遺跡ハンターである、バレチノの古代の歴史や文化の知識の豊富さに、クルタ族の人間は知識欲の高さが多い者が多く。

バレチノの生で見た遺跡などの話を聞き、すぐに意気投合したらしい。意外と単純な奴が多いな……

その仲良くなつた者達と数年交流をとつたりしていたら、自然と遺跡の調査や遺跡までのガードなどを、クルタ族に頼むようになつたらしい。

バレチノ曰わく、下手なハンターより強いクルタ族は頼りになつたとか。

そういうえば、数名の大人が街に下りて、数ヶ月帰つて来ない時もあつたな。

ある日、バレチノが知り合いのバイヤーから、クルタ族の緋の目が裏の競売で大量に流れている、と聞いたのが始まりで。

クルタ族の強さを知つていてるバレチノは驚き疑つたものの、ハンターの繋がりや情報屋から、情報を得て、クルタ族を全滅に追いやつた者達までたどり着き。

そうして1人でも生き残りはいなかと、クルタ族の集落を探しだしているところに

、どこからか聞きつけたのかわからぬ、テルミニと合流しここまで来たのだ。

で、今は料理を食べ終え、バレチノは知り得た情報を全て喋つた。隠す事なく全てを。

俺は知つていたが、人伝に聞いた事により、あの時の事を思い出し。嫌でも自分の【目的】を、必ず達成させねばならない事を再認識させられる。

俺の横に座つたクラピカを見る。

事実を聞かされた。

心まで抉るよう、おぞましく、醜い人の欲望。

ただ緋の田を奪うためにクルタ族を殺した、吐き気がするまでの欲望

クラピカは興奮状態になり眼は赤く染まり、体を小刻みに震わせ、  
あます事なく全身全てで怒りを表していた

クラピカは怒りのあまり拳を机に叩きつける。

「そんな事のために！ そんな事のために、みんな、みんなを殺  
したのか！」

田の前いないはずの相手に激情のまま言葉を吐く。

「許さない……、絶対に絶対にッ！」

原作のクラピカの怒りは知っている。

ここまでとは、原作とは違い、俺がいるからもう少し安定している  
と思っていた。

が、都合がいい、これでいい、これでいいんだ。

俺の目的にはクラピカが必要だ、これは決定事項なんだ。

俺がゲスなのはわかつて、自分の目的のためにクラピカを利用し  
ようとしている。

罪悪感？ そんな物いくらでも受け止めてやるよ。

これはクラピカのためでもあり、見殺しにしたクルタ族のみんなの  
ためもある。

俺は胸が痛むのを無理矢理振り払い、クラピカを見て声をかける

「外に行くか」

「アルベル……」

俺の目を見返す瞳はまだ赤みを帯び、興奮状態は収まつていない

「頭冷やすぞ」  
「わかつた……」

席を立ち、クラピカの背を押すように、扉の前まで連れて行く

「すみません、バレチノさんテルミさん、外で頭冷やすしてきます。  
気にせず、先に寝ておいて下さー」

「うむ、頼むぞ」  
「テーブルは自分が片付けておきますので、じゅうくじ

2人の返事を聞き、外に出た。

少し肌寒いが、今はそれが心地よささえ感じる。

無言で俺とクラピカは歩き、みんなが眠る広場まで場所まで行く。  
広場に着き、墓と呼ぶにはお粗末な墓の前で俺とクラピカは立つて  
いる。

そのままどれくらいいたつたのだろうか、クラピカが落ちつくまで待  
つた。

「ありがとう」

どうやら落ち着いたのか、クラピカが俺に話しかけて来た。

「何で礼なんだよ」「何となく、かな？」  
「なんじゃそれ？ 気持ち悪い事言つな」「そうだね、ごめん」

「いいよもつ、謝んな」

クラピカは母親と父親が眠る墓の前まで行くと、その前で片膝を付く。

「父さん母さん」

月の光でしかクラピカの顔はよく見えないが、俺には泣いてるよう見えた

「クラピカ……、話がある」

「僕もあるよ」

「そうか、先に言つてくれ。俺は後でいい」

「うん」

一度考えるよつこ、俺から視線をずらし、また視線を戻した。

「僕はみんなを殺した、幻影旅団は許せない。アイツらを必ず捕まえてやる」

クラピカは墓を見渡し、言葉を続けた。

「絶対にみんなの眼を取り戻す。どこにあるのか今はわからないけど、

絶対に取り戻す、そしてここにみんなの眼を持つて帰つてくる、いつまでかかっても絶対に取り戻してみせる、僕はそれでいい……」

原作通りか。

俺がいなかつたら、間違いなく原作のままの道行きになつただろう。

だが俺がいるのだ、幻影旅団を知っている、どういう思考をして、どんな能力を持ち合わせているかを知っている。原作のままではヌルい、ヌル過ぎる

俺には目的があるんだ、その目的のためには原作が始まる前までに、クラピカはもっと強くなつて貰う必要がある。

「俺もその意見には賛成だが、足りない、足りないんだよ、クラピカ」

「アルベル？」

クラピカは俺を見て、戸惑つていてるように見えた。

「何が、足りないの？」

「捕らえる？ 生温いんだよ、俺は俺は……」

俺はゴミだ、理解してる。

クラピカは甘い、原作ではその甘さが仇になつた。必要はない、そんな物は犬にでも喰わせてやる。

俺の目的には幻影旅団は邪魔だ、邪魔何だよ。邪魔なら消せばいい、どんな事をしてもだ。

「俺は捕らえるだけじゃすまらない、殺す例え命乞いしそうと、何しようが殺す」

多分俺はあの時、1人でみんなを埋め、泥と血が手に付いたのを洗い流した時、人として大事な物まで、水で一緒に流してしまったのかもしない。

「ア、アルベル？」

クラピカは俺ではない、別の何かを見ている目をしている。  
俺が次に発する言葉は卑怯な言葉だ、クラピカは絶対に断らないと  
わかっているから。

「だから俺に力を貸して欲しい、ゲス共を殺すために力を貸してくれ。」

俺にはもうクラピカしかいないから、クラピカしか頼めない、お願いだ」

クラピカに2度目となる、本気のお願い。

答えはわかっている、俺にはクラピカしかいないように、クラピカ  
にも俺しかいないから。

しばらく黙っていたクラピカが答えた、それは俺の予想通りの物であつた。

クラピカの顔は見れなかつた、どんな顔をしていたのか、どんな事を  
を考えていたのか、少し怖くなつてしまつたから。

## まわ話（後書き）

少しだけ進展しましたが、いまだに集落がら出てないです  
展開が遅いと思われた方申し訳ありません

## キュウ話（前書き）

オリキヤラ難しいです。

## キュウ話

欲しいのは、力とそれを扱える知識と経験。

俺の目的の邪魔になる、旅団抹殺には必要な物が腐るほど存在している。

まず優先事項なのは【念】の修得、これを絶対に覚えなければならない。

早ければ早いほうがいい、経験、知識をより多く蓄えられる。

なら、どうする？ 答えは念を使える者に師事して貰うのが手っ取り早い。

なら、誰に？ 答えは今この村にいる、ハンターに師事して貰う。

俺には今運が向いている、『都合主義に乗っかるか？

しかし運は離れる、次が上手く行く何て事はわからない。うまく事が運べばいいが、人間落ちる時はトコトン落ちる。

落ちたらそこで終い、這い上がるなんてそれこそ無理だ、まるで夢のような話し、それが現実だ。

悲しいかな、俺が選べる選択肢が複数あるなんて、そんな贅沢な物は存在しない。

当たつて碎ける、か碎けたくないがしょうがないか。土下座でも何でもしてやるよ。

修練場でクラピカと朝の鍛錬を終えた後、俺はその事をクラピカに話した。

クラピカは誰かの元で鍛える事を、何の迷いもなく頷き賛成してくれた。

原作前のクラピカはどう考えていたかは知らないが、今のクラピカは自分の弱さを知つており。

自分達2人だけで鍛えても、いずれ限界が来る事も理解しているのだ。

それに冷静さを保つているクラピカはトコトン鋭い、俺がクラピカに弟子入りの事を言つて来るのが、多分わかつていたんだと思つ。

「いいのか本当に？」

「僕はアルベルに付いて行くよ、それに前に約束したよね」

「そうだな」

「違うよ、アルベル」

「え？」

クラピカは何かを決心をしたような顔で、俺を真つ直ぐに見つめてくる。

俺の本心を打ち明けてから、顔には出していかつたが、心の中で葛藤していたのはわかつていた。

クラピカは優しい、あれだけ憎しみを抱いている相手を殺す、ではなく捕まえる、と無意識に言つてしまつほど優しい奴だ。長年一緒にいる俺が一番知つている

そんな葛藤があつたのかさえわからぬ程、クラピカの顔には一切迷いがなかつた。

「僕に言つたじゃないか、傍にいるつて、どこにも行かないって

「あれか……」

あの時勢いで言つたが、今思つと、とんでもないセリフだよな。決して男に言つていいセリフじゃない。

「嘘つきだよね、アルベルつてさ

「そりゃ？」

「うん、あの時言つた事は嘘でもいいよ、でも決めたんだ」「何を？」

「今度は僕が約束するよ、僕はアルベルの傍にいるし、僕はどこにも行かない」「は？」

予想外のクラピカの言葉に、俺はポカーンと口を開けたまま放心状態になつた、かなり間抜けな姿だったはず。

そんな間抜け面がおかしかったのか、クスリと笑い、嬉しそうに続けた。

「約束だからね？ 僕は破るつもりはいよ

なにを言つているんだコイツは……、人の事言えんが、よくそんな恥ずかしいセリフがいえるな。

珍しく年相応に、いたずらっ子みたいに笑うクラピカに、俺は何も言ひ事ができず、ただただ黙つてクラピカを見ていた。

「おおう、やはほつこにめつたか

変な空気が漂つていてる修練場に、バレチノがやつて來た。

「どうしたんですか、バレチノさん？」

「話したい事があるんじやが、ちょっと良いかの？」

「俺達は構いませんけど、何か大事な話しなんですか？」

「クラピカの家に行つてから話そう、テルミも待たせておるじの」

俺と、クラピカはバレチノの後を付いて行く。

何の話しだ？ そろそろ集落から下りる事を言つつもりか、なら行動に移さなければならない。

クラピカの家に戻ると、どこから持ってきたのかわからない、ティーセットで優雅に紅茶を飲んでいるテルミがいた。

「待たせたの」

「いえいえ、皆さんを待つてゐる間に、美味しい紅茶を飲む事ができましたので、

お気になさらずに」

「うむ、まず2人共座れ、話しあはそれからじや

「はい」

「ういっす

全員席に付いたのを確認したバレチノは、一度ゴホンと咳払いをして、語り始めた。

その内容は、原作前にクラピカが辿るはずだった物に近いのかもしない。

バレチノは俺とクラピカを保護し、信頼できる知り合いの施設に預ける事だった。

バレチノはそこそこ稼いでいる、稼いだ額の大半をその施設に出資し、親がいなくとも立派に育つように、様々な教育を施しているらしい。

なぜ、そこまでして子供によくしているのかわからない。

しかしバレチノは想像以上の善人だ、原作クラピカがハンターの職に、あれだけの思いを持つのもわからんではない。

だが、そんな悠長な事してられん、俺の目的を達成させるには、そんな施設で時間を無駄にする事はできない。

「どうする？ お前たちなら、文句なしで施設に入れるぞ」

俺はクラピカを見て、任せるよ、の弦を聞いてバレチノに答えた。

「とてもいい話しだすが、すみません」

俺は頭を下げる。

「やつぱりの、そんな気がしておったわ」

何がおかしいのか、バレチノが笑つた。

「せつかくのお話し、申し訳ありません」

「かまわんよ、それと――――思つてもない事で謝らんでいい」

「何がでじょうか？」

笑つていたはずのバレチノの顔付きが鋭くなり、俺を睨む。敵意のある視線に、俺は思わず「ククリと唾を飲み込んだ。

「ふむ、大人を甘く見るなよ若僧……、すみませんと口に出していくが、

それは本心ではなからう？ 悪いとは思つてもいないくせにの、お前のその癖が、俺は気に入らんな」

見透かされた、舐めていたバレチノを。

俺は黙つてしまい、何も言い返す事ができなかつた。

何か言いたそうなクラピカを手で静止させる。

「彼には悪気はないようですから、その辺りでおやめない、誰しも本心を隠すの当然の事です。あまり目くじら立てるのはよ

くありませんね」

沈黙を破つたのは予想外にテルミだった、まさか俺をフォローしてくれるとは。

「テルミ、お前は相変わらずじやな、しかしこの小僧は危つい、いざれ自分が付いた嘘で全てを壊しかねん、なら注意するのが大人の仕事じや」

「偽善的ですね、嫌いではありませんが、好きでもありません」

「なら、黙つておれ」

「やれやれ、あなたがそれを注意したとしても、人の本質は短期間で治る物じやあ

りませんよ、これ以上無意味な説教を続けるのは時間の無駄です、そう無駄です

「……ふん」

バレチノは機嫌を悪くしたのか、鼻息をならし、そっぽを向いた。

「アルベル君、話せるところまで話して下さい、話したくなれば結構ですがね」

やはりこの人は苦手だ、何もかも知っているような言い方、笑顔の裏に何かがある、気味が悪い。

どちらにしろ言わねばならない事だった、ちょうどいい、もう俺は止まれないんだ。

「わかりました、クラピカもいいな」

「うん、アルベルに任せると」

俺は話した、幻影旅団の事も、力が欲しい事を、弟子にして欲しい

事も。

「最初からそう言えばよかつたんじや、しかし復讐のための力か…」

「反対ですか？」

「そんな事は言わん、復讐したければしたらい、良いか悪いとは関係ない。

人が成長するのは理由は何にしろ、目的が必要だと俺は思つておる。よく復讐はイカンとか言う奴こそ信頼できん、それをなす信念、意思を

貫き通し、目的の先に何を見るか、それこそ成長を促す物だと思つてある

「バレチノさん」

「しかし、弟子か……、俺は無理じやな、人に師事する事は苦手だしの」

「テルミさん、お願いします、俺達をあなたの弟子にしてください。俺はもう一人この場にいるハンターを見た。

「テルミさん、お願いします、俺達をあなたの弟子にしてください。俺はもう一人この場にいるハンターである、あなたにお願いしたいんです！」

椅子から降り、頭を下げる。

ブラックリストハンターとは、凶悪な犯罪者の賞金首を専門に捕縛する、スペシャリスト。

捕まえるのは殺すより難しい、それを実現させるまでの力が俺達には必要だ。

最初から決めていたハンター証を見た時から、2つ星のブラックリストハンターのテルミに、最初から俺は何とかして弟子にして貰う事を。

テルミの人間性何か関係ない、強くなれる可能性が高い方に付く、

俺自身の感情なんて二の次だ。

いきなりそう言われたテルミは、大した感情の揺れも見せず、貼り付いた笑顔をピクリと動かす事もなかつた。

「おや、自分でですか?、今までの流れだとバレチノに頼むと思つていたのですが」

「お願いします、僕とアルベルは強くなつないダメなんです!」

テルミの言動からは、全く感情を読み取れない。

「ほう、いいんじやないか、お前確か弟子が既におつたろ?」

「あれは例外ですよ」

テルミは困りましたね、と全然困つてなさそつに、ポリポリとこめかみをかく。

必死にテルミに頭を下げる、最近人に頭下げすぎだな、でもこれしか出来る事は俺にもクラピカにもない、ただ頭を下げるだけ。了承の返事を聞けるまで頭を上げるつもりはない、粘りまくつてやる。

「テルミよ、弟子にしてやれ、少し鍛錬の様子を見たが、2人ともセンスはあるようだしね、お前の弟子にもいい刺激になるじやろ」

「まったく、他人事だと思つて好き勝手言いますね」

「事実じやろ?、俺が今度仕事手伝つてやるし、弟子にしてやれ、2人とも弟子にするつて、言つまで動かん気だぞ」

「そのようですね、仕方ありません、まず2人とも顔を上げて下さい」

テルミの弟子入りにたいする、肯定とも否定とも取れない言葉を聞き、俺とクラピカは頭を上げた。

「ふうー、気持ちは理解しました、ですが生半可な事ではないですよ。

ブラックリストハンターと動向するという事は、危険が付き物です。

私自身も色々やつて来てますから、相当な人間から恨みを持たれてますし、

「どんな事があるかわかりません、それでもいいのですか?」

「はい、耐えてみせます」

「僕はアルベルと一緒になら、どんな事でも耐えられます。アルベルと一緒にならどんな困難だって、立ち向かえる自信があります」

クラピカあ……、その発言は問題あるのではなかろつか。

「いいでしょ、しかし3点ほど条件があります」

条件だと、何かムチャな事言われたらヤバいな。

「条件とは?」

「一つは自分の弟子となるのなら、2人には自分の仕事を手伝だつて貰います」

「はい、大丈夫です」

「僕もです」

それぐらいがちょうどいい、俺達が進む道は険しい程がいい、それを糧にしてやる。

「2つ目は、自分の指示に従つてもらいます。ただし無理だと判断したら、  
断つてくれても結構です」

無理だと判断したら断つていいとは、俺達を試すって事か、やってやる。

「最後は一番簡単だと思います、多分ですが……、それは——」

一瞬だが、テルミの笑顔が歪んだように見えた。

最後の条件に俺とクラピカは驚きを隠せなかつた、まあ頑張ります、  
としか言えなかつたのだ。

「許可しましよう、今日からあなた達は自分の弟子です。

条件はしつかり守つて貰います、特に最後の条件は頑張つて下さい

「はい、頑張ります  
「僕も頑張ります」

進めた、後は俺次第でどう転ぶかわからない。

正直テルミがこんなに簡単に、返事をしてくれるとは思つてなかつた。

テルミの言動は全て芝居がかつてゐる、バレバレなのに、それがワザとなのかわからぬ。

どうもテルミは、俺達2人が弟子入りをお願いした事すら、わかつていた気がする。

全てテルミの計算通りに進んだ気がしてしょうがない、根拠のない勘だが。そんな予感が俺につきまとつ。

「話しあは纏まつたようじやな、なら俺は明日にはこの村から下りて、

街に行くとしようつかの、テルミは必ずつするんじゃ？

「自分も明日には下りるつもりですよ、それでは最初の指示です、2人とも出発の準備を整えて下せー、やる事がが多いでしょ、期限は明日の朝までです、しばらくここには帰つて来れないでしょうから、

悔いが残らないようにしきなさい、いいですね？」

明日かよ、と思つたが、俺とクラピカは師匠となつたテルミに頭を下げ、クラピカの家から出た。

とりあえず、持つていく荷物を纏めなくてはいけない。

「ありがとう、クラピカ、俺のわがまま聞いてくれて」

「アルベルつて馬鹿だよね」

「なにい！」

「朝言つたよね、僕はアルベルについて行くつて」

クラピカもテルミの異常性を氣付いているはずだ、俺より鋭いクラピカが、テルミの居がかつた言動に疑問を持つのは当然だ。

「ところで渡したい物があるだけ」

「いきなりだな、何かくれんのか？」

「倉庫に置いてあるから、取りに行こう、つこでに持つて行く物もあるしね」

「なら、さつと行こうぜ」

「うん」

倉庫に付いたら、クラピカが一番手間にある木箱から、包装されている何かを取り出した。

「はい、これ

クラピカがそれを持って来て、俺に手渡した。

「何これ？ ちょっと重いか

「開けてみてよ」

俺は包装をほどき、中から出てきた物を手に取った。

「籠手、鉄の籠手か？ 鉄にしては軽いな？」

「鉄じゃないよ、ジョウセツガ地方で取れる特殊な鉱物の二ナーロウ石を

削つて作った物らしい、硬度は鉄より硬く、鉄より軽いから使い勝手はいいと

思う。かなり珍しい鉱物だから、市場にもなかなか出回っていないつて話し

ふざけた名前だが、触つて見た感じかなり頑丈だ、しかも重いと言つても苦にならないレベル、こいついう物に興味はないが、かなり良い物だと思う。

内側に、変な模様のような字が沢山書かれてるが、これは「デザイン

なのか？ 見覚えがあるんだが忘れてしまった。

「これをどこで？」

「父さんが若い時に使つてたのを、あんな事がある以前に僕が貰つてたんだ」

「いいのか？ そんな大事な物、俺が貰つて？」

「いいよ、前にアルベルと稽古した時、何か武器を持つた方がいいつて

言つたでしょ、あれからこの父さんの籠手を思い出して、渡そうと思つて

たんだけど、バレチノさんやテルミさんが来たから、渡すのが遅れちゃったんだ

「やうか、ありがと」

「どういたしまして

何か爽やかだな、これが若さか？

ちょっとこれ付けてみるか、ガチャガチャと籠手を弄つてみると。

「アルベル、付けてみたい気持ちはわかるけど、先に荷物を纏めようよ」

「あ、そうか、スマン」

「うん、ゆっくりやつたら日が暮れそつだしね、街まで長いから体も休めないと」

「おう、わかった」

結局明日の準備が終わる頃には、日が暮れていた。

「こうなる事が全部わかつておったな、テルミ」

「フフツ、何の事でしうか」

テルミは紅茶の入ったカップを手に取り、口を付け、わずかに残つていた紅茶を全て飲み干した。

「白をきりおつて、最初からおかしかったんじや、幻影旅団の手掛かりを探すために

、付いて来たのかと思ったが、数日立つても手掛かりを探す気配すらない、

何をしているかと思えば、ずっとアルベルを観察していただけ

テルミは大袈裟に両手を上げ、万歳のポーズをとる、人を馬鹿にした様子にバレチノは僅かに苛立つ。

「バレしてましたか、お手上げです、さすが抜け目がないですね」

「あの子達が生き残つておったのも、知つておつたのか？」

「さあ、どうでしょ、知つていたのかもしませんね」

バレチノが机を叩き、机がそのショックでギシギシと軋む。

「まあ そう怒ららずに、勘違いして貰つては困ります

「何がじや」

「自分はあの2人を利用して、何かしようとか思つていません、強いて言えば、

「気になつただけです、あの2人、いえ、アルベル君のほうがです」「なぜじや？ 確かにあの小僧はなかなか面白いが、気にする程の人間なのか？」

テルミは答えない。

ただ笑つてはいる、その顔からは、長年の人生経験を持つ、バレチノですらわからない程に何も伝わつて来なかつた。

「ちつ、お前のそういう所が俺は嫌い何じや

「すみません、秘密と言つことで勘弁していただけませんか？」

「ふん、どちらにせよ、あの2人が選んだことじやからの、俺が心配するのも

お節介がすぎるの……」

「別に」とつて食おつなんて思つてません、少しばかり大変な田にあります

うだけです」

「当然じゃな、ハンターの弟子はそういうもんじやしな」

バレチノが笑う、テルミは僅かに田を細め何かを考えだす。  
それはアルベルとクラピカの事かもしれない、それはテルミにしか  
わからない。

「ああそつ言えば、台所にお酒がありましたが飲みますか？」

「いらん、今はそういう気分ではない」

「なら自分だけ頂きましよう、今の自分は凄く気分がいいんです」

「珍しいの……」

「ええ、あえて言つなら、探し物がやつと見つかつたつて感じです  
ね」

普段、感情を表情に出さないテルミが誰にでもわかるぐらいい、色濃  
く笑つてゐる。

それが逆に不気味でバレチノは何を見つけた、と聞けなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8860z/>

---

復讐者の仲間のような感じの人

2012年1月5日21時04分発行